慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会主義者の「歴史的法律的」資本観概略
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.7 (1920. 7) ,p.917(41)- 945(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19200701-0041
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200701-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歩の田地を持つて居る地主は、全國各府縣を通じて幾人位あるであらうか、恐らくは十指を屈するに足るまいと思はるゝのである、然らば我が國に於ては封建時代が長く續きて其の間ヅット間斷なく、長子相續法が行はれつゝあつたに拘はらず、土地の分配上には更らに何等の影響もなかつたことは明白である。

社會主義者の「歷史的法律的」資本觀概略

小泉信三

一

Adam Smith が資本 Capital と云ふ一語を以て所得の泉源たる富と、生產要具とを併せ同稱するの端を開いてから、經濟學には、一方では實際社會の慣用と一致しない資本（生產要具）なる術語が輸入せられ、他の一方では一語を以て、相互に異なる二物を同稱するの混雜が招致せられた。Smith の後繼者は大體に於て生產要具に重きを措いたが、併し同時に（殊に分配論に於て）必しも常に收入泉源としての資本を無視することが出來なかつたので、資本論は經濟學上最も紛糾多き部門とならざるを得なかつたのである。左れば K. Knies は謂ふ、資本の定義の場合に於ては問題は普通學問上に於て定義の成敗當否と稱するものとは些か趣きを異にして居る。異說があつて決しないのは抑も何を以て「資本」となすべきか、その「資本」なる名稱を與ふべき物體その者であつて、經濟學上一般に人が認めて資本となす處のものゝ

特徵を如何にして概括すべきかの問題ではない。既に存する資本なる名稱を抑も如何なる物體に附與すべきかに就て議論があるのである。(K. Knies, Geld und Credit, 1885 Erste Abt. S. 24. 25)。而して Knies, A. Wagner, v. Böhm-Bawerk 等の事業は在來の資本なる名稱が必しも一致せざる事物に適用せられ來つた事實を先づ明かにすることに在つた。標題に掲げた「歷史的法律的資本」なる文字が Wagner の用ゐるところに從つたものであることは既に讀者の知るところであらう。Wagner は其經濟學原理に於て、財、財產及び資本を論ずるに方つて、純經濟的觀察と社會的若しくは歷史的法律的觀察 (rein ökonomische und sociale oder historisch-rechtliche Standpuncte der Betrachtung) とを區別する。第一の見地は人類其者を直ちにその自然との對立に於て見る。而して斯くして生ずる經濟的關係を究めようとする。反之第二の見地に立つときには、人は同時に一國民內に於ける個人及び階級相互の關係並に國民と國民との政治的勢力的關係を併せ顧慮する。而して、此境遇から生ずる、個人、階級、並に國民相互及び其の自然に對する經濟的關係を尋ねようとするのである。(Grundlegung der politischen Oekonomie. 3. Aufl. 1893 Erster Theil S. 288) 而して此觀察を資本に適用して彼は純經濟的意義に於ける資本と、歷史的法律的意義に於ける資本とを區別する。前者は即ち過去の生產の結果として生じ、新らしい財の作出 (Herstellung) の爲めに技術的要具として供用せらるゝ經濟財(可動財)の蓄積、即ち生產要具の蓄積を斥して謂ひ、後者は或人の所有動產中其人に取て營利手段 Erwerbsmittel として所得(賃料利子)收得の爲め供用せられ得る部分、從て其目的の爲めに所有獲得せらるゝものを斥して謂ふ。簡約して云へば賃料基本 Rentenfonds である。即ち此第二の意味に於ける資本の成立し得んが爲めには、先づ生產資料の私有、及びそれから生ずる賃料並に利子の收得を承認する法律制度の存在を前提要件とするのである。Wagner は又純經濟的意義に於ける資本を國民的若しくは社會的資本、歷史的法律的意義に於ける資本を呼ぶに私的資本の名稱を以てして居る。而して從來大體に於て純經濟的見地に傾いた多數經濟學者の資本觀に對して、資本の一定の社會制度の豫在を條件とする歷史的概念なることを殊に努めて力說したのは社會主義者の Marx 及び Lassalle であつた。即 Marx は資本が一の「歷史的生產關係」ein historisches Produktionsverhältnis なること、Lassalle は又資本が「一の歷史的範

疇」eine historische Kategorie なることを明言して居るのである（Das Kapital, I. 7. Aufl. S. 731 及び Lassalles Reden und Schriften. herausgegeben von Ed. Bernstein 1893. Bd. III, 171）。

然るに Marx 及び Lassalle の前には更に Carl Rodbertus があつて、既に物的自然的關係のみを觀たる場合の資本と、土地資本の私有せらるゝ今日の關係 die heutigen Verhältnisse を前提とする場合の資本と、即ち彼れの謂ふ資本當體 Kapital an sich 若しくは國民資本と資本財産 Kapitalvermögen 若しくは私的資本との區別を明かにする必要を唱へて居た。而して右に掲げた Wagner の純經濟的觀察と歴史的法律的觀察との區別は之を Rodbertus に得たものである事は Wagner の自記するところに依て明かである。（a. a. O. s. 288. 306 ff.）

本論の目的とするところは純經濟的見地に傾かうとした舊來の經濟學に對して歴史的法律的觀察の必要を力説した Marx, Lassalle 及び更に遡つて Rodbertus の資本觀を學んでその大略を記すにある。

二

「資本」と云ふ言葉の意義は昔から如何なる變遷を經て今日に及んだか。經濟史家の記すところに從へば、資本 Capital はもと古羅馬の語 Caput（頭）に出て居る。Caput は俗用語として貸金の利子に對する元本の意味に用ゐられた。中世に至つて Capitale なる語が Caput に代つた。同じく貸附元金額の義である。而して Capital を此意味に解することは mercantilism の時代を通じて十八世紀に及んだ。Adam Smith の同時人 Sir James Steuart の如きは一七六七年の著作に於ても猶ほ利息に對するものとして貸附元金の意味に此語を用ゐて居たのである。然るに此間に一方では Physiocrats 等が此語を廣く解して貨幣額以外のものをも資本を以て呼ぶことが漸く始まつて居た。就中其主旨を明かに述べたのは Turgot で、彼れは其 Reflexions sur la formation et la distribution des richesses 第五八節に記して「土地の收入より或は其勞働又は產業の賃銀より、苟も其の年々要する以上の價値を收むる者は此餘剩を保存し、且つそれを蓄積することを得る。此の蓄積せられたる價値が人の稱して資本と謂ふところのものである。……此價値額若しくは資本が金屬の一定量を以て成ると、他の如何なるものを以て成るとは全然無差別である。何となれば貨幣は有ゆる種類の價値を代表すること有ゆる種類の價値が貨幣を代表すると正

に同じであるからである。……」と。然るにTurgotに次ぐAdam Smithは、一方では財の蓄積にして資本たるものとたらざるものとを區別することに依て、資本なる言葉の意味を局限すると同時に、他の一方に於ては當時の實際社會の慣用語は勿論、學者の著述にも用ゐられなかつた「國若しくは社會の資本」なる新概念を案出することに依て資本論紛糾の端を開いたのである。

資本概念の歷史的變遷に就て參考すべき主要なる著作左の如し。

K. Knies, Geld und Credit. II. Aufl. 1885. I Abt. S. 24-83—Spiethoff, Die Lehre vom Kapital. Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert 1908. Erster Teil.—Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins II. Bd—W. J. Ashley, Economic History and Theory, 1906 Bk II pp. 429-434—same, "Capital," An Encyclopaedia of Industrialism pp. 14-25—Ed. Cannan, Theories of Production and Distribution 1917. pp. 53-107—福田博士國民經濟講話、坤(二)第三十一章

Capitalが猶ほ貸附貨幣額の意味に用ゐられて居た、十七八世紀の英吉利で、今日の企業資本に相當する言葉として最も廣く用ゐられたのはStock(財の蓄積)であつた。而してAdam Smithも國富論第一篇では此意味で此言葉を用ゐたのである。然るに第二篇に入ると直ぐに彼れは資本CapitalとCapitalに非ざるStockとの別を論ずる。其大意を云へば斯うである。

三

或人が所有するStockが僅かに數日若しくは數週を支へるに足るときは、彼れは、それから收入を得ようと云ふ事を考へない。彼れは其財の蓄積を出來る丈け儉約に消費して、それが消費し盡されない前に之に代る可き或ものを勞働に依て得ようと努める。此場合彼れの收入は勞働のみから得られる。而して之れが凡べての國の勞働貧民の大部分の狀態である。然るに彼れが數月若しくは數年を支へるに足るStockを有するときは彼れは當然其大部分から收入を生ぜしめようと努める。而して直接消費の爲めには此收入が生じ始める時迄支へる丈けを殘して置く。其處で彼れのStockは二の部分に分たれる。一は彼れに收入revenueを與へる部分、他は彼れの直接消費に供用せらるゝ部分である。而して後者が即ち彼れの資本capitalである。資本は更に之を分ちて流通資本(circulating capital)及び固定資本(fixed)とする。前者は貨物を生產製作購買し、之を賣却して利潤を得るの用に充當せられ、同じ形態の儘で、同じ所有者に繼續保持せらるゝ限り何等の收入

を生ぜず、所有者を更へることに依て始めて利潤を生ずるもの、例へば商人の仕入れた商品、工業家の原料、賃銀支拂に投ぜらるゝ資本の如きは即ち是れである。（即ち之に屬する資本は絶えず一の形態に於て其所有者の手から出て行き他の形態で之に復歸する。而して斯くすることに依てのみ所有者に利潤を齎らすのである）。之に反して後者は土地の改良、機械建物等其所有者を更ふことなくして利潤を生ずるものを謂ふ。(Wealth of Nations, edited by E. Cannan Vol. I pp. 261-3)

以上述べた丈けの所を以てすれば Adam Smith の資本の定義は甚だ明瞭である と同時に、彼れの所謂資本は又實業界の通用語に於ける資本と同義のものであつた。即ち彼れは財の蓄積其者から出發せずに、其所有者の立場から之を見た。財と其所有者との關係のみを目中に置いて、即ち上述 Wagner の所謂「歴史的法律的」見地に立つて資本を定義したのである。然るに Smith は其論を是丈けに止めないで、更に進んで一國若しくは一社會の資本なるものを論ずるのである。第一の立場からは所有者に所得を齎らすものが資本とせられたのであるが、今彼れは之に加ふるに國民全體の所得を增加せしむる國民資本とも云ふべきものを數へるのである。即ち謂へらく、個人所有の Stock が三の部分から成ると同樣に一國又は一社會の Stock も亦三の部分に分たれる。第一部は即ち直接消費の用に充てらるゝものであつて、其特色は何等の收入又は利潤を擧げない事に在る。第二部は即ち固定資本で、其特色は所有者を更へずして利潤を擧げる點に存する。（一）勞働を容易にし且つ簡約する機械器具、（二）店舗、倉庫、仕事場、農場建物等、單に其所有者に賃料を齎らす許りでなく、併せて其利用者の爲めに收入を生ずる建物、（三）開墾、排水圍墻施肥等の土地改良、（四）國民が修得せる技能が即ち是に屬する。第三部は流通資本で、其特色は流通すること、即ち所有者を更へることに依て收入を生ずる點に在る。更に之が四種に分たれる。第一は貨幣（他の流通資本を流通せしめ之を適宜に分配するの作用をなす貨幣）第二は賣手の手中に在る食料品、第三は衣服家具家屋の原料、第四は未だ消費者の手に移らず、生産者又は商人の手中に存する完成品が是である。

茲に至つて Smith の議論は餘程混雜して來る。個人の場合にも一社會の場合にも、資本と資本ならざるものとの區別の標準を、Smith は常に收入を生ずると否とに

求めて居る。それで此區別は今日の術語に謂ふ生産財と享樂財、又は塊太利學者の所謂間接財と直接財との區別と同じではない。即ちSmithは食料品衣服の如きものを直ちに資本非資本の何れにも屬せしむることなく、その消費者の手に在ると賣手の手に在るとに由て、或は之を消費財と觀、或は之を資本として居る。即ち此場合、社會資本を論ずるに方つても、彼れは財の所有者の立場に立つて資本と非資本とを區別して居る譯である。然るに Smith は此態度を一貫させないで、或場合には技術的生産の有無を以て問題を決しようとする。即ち彼れが住宅 dwelling house を以て如何なる場合にも社會的資本たらざるものとするのは是である。何故住宅は社會的資本とはならないか。家屋其者は何物をも生産することが出來ぬからである。(as the house itself can produce nothing…)「故に家屋は其所有者には收入(家賃)を生じ、從て其人に取ては資本の用を爲すかも知れないが、社會一般に對しては何物をも生ずることを得ず(it cannot yield any to the public) 又社會に取つて資本の用をなすこともしない。人民全體の收入は之に依て嘗て些かも增加することはない」。(l. c. p. 263)と云ふのである。そこで國民全體の收入を增す資本とは之を要するに社會の爲めに新たに物を生産すると云ふ意味に解釋しなければならぬ。茲に至つて社會的資本と資本にあらざる stock との別は、生産要具と享樂財との區別に歸着する。併し、さうなると Smith が賣手の手中に在る食料品、生産者又は商人の手中に在る完成品を社會的資本の中に數へる理由が立たなくなる。享樂財はその何人の手に在る場合でも、技術上享樂財たることを失ふものではないからである。要するに Smith の觀た一個人の資本と、一國又は一社會の資本との別は、大體に於ては「歷史的法律的」見地から見たのと、「純經濟的」見地から見た資本との區別であると云つて好いが、併し彼れは此區別の標準をも嚴守することをしなかつたのである。故に曰く「Smithは其出發點たる二の立場の異同を看過して、己れが觀察したる兩個の特性に應じて純一なる財の分類をなす事を怠つた。否な彼は所得が財自らの生産力から生ずることを求めて、所得を生ずることゝ生産力との二性質を混同し、之に依て次の二世代の爲めに途を擁塞したのである」。

四

Adam Smith が二樣の意義に資本なる名稱を用ゐたことは上述の通りであるが、

Smith の後繼者が重きを措いたのは其の生產要具の意義に於ける資本であつた。Smith の國民資本又は社會資本の概念は經濟學上に於ける「唯一の資本概念 *the* conception of capital」となつて、資本なる名辭を橫領したのである。即ち Ricardo は資本とは「一國の富の生產に供用せらるゝ部分で、勞働に效果を與へる爲め必要なる食物衣服道具原料機械等を以て成る」(Works edited by Mc Culloch 1871. p. 51.) と云ひ、J. S. Mill は「再生產に用ゐる富」を資本とし、又「苟も一國の生產の用に供せらるゝものは凡べて皆資本である。從て又反對に一國の全資本は皆生產に供せらるゝ」と記して居るのである(Principles edited by Ashley pp. XXXIV & 56)。Mill は又自ら生產に參加することなく、其財產の利子に衣食する人の財產は、普通の用語では之を其個人の資本と認めて差支ないと云ひ乍ら猶且つ之に資本の名稱を許すことを吝んで、彼に取つて資本に等しきもの equivalent to capital と云ふ言葉を用ゐて居る。斯くして經濟學上の術語は市井の通用語と相遠さかる事遂に New English Dictionary をして、人がそれを以て事業を營む stock を商業上の資本となし、之に對して、新しき生產を營む爲めの基本として用ゐらるゝ富を經濟學上に於ける資本の定義なりとして、

經濟學上の資本は實業界に所謂資本とは別の物なるかの觀を呈するに至らしめたのである。(Encyclopaedia of Industrialism pp. 22-3)

既に生產要具を以て資本とする以上は、資本の成立には何等法制的條件の豫在を必要としない。生產が行はれるところには必ず資本があるべき筈である。故に Ricardo は Adam Smith が價値論で資本の蓄積未だ行はれざる原始社會と今日の社會とを區別したのを不當として、「資本の蓄積に就て云へば Adam Smith が言及する彼の原始狀態に於てすら猶ほ狩獵者をして其獲物を殺すことを得しめる爲めに多少の資本 some capital …が必要であるだらう。多少の武器がなくては海狸も鹿も之を殺すことを得ぬだらう」と云ふのである。(l. c. p. 16)

「Lassalle の批評の尊重すべきは此點に於てゞある。」(Ashley) 併し Lassalle はその Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch oder Kapital und Arbeit 1864 に於て其討論家としての面目を遺憾なく發揮し、經濟學傳來の資本概念に對して、甚だ痛切なる批評を加へたけれども、彼れの說は決して其獨創ではなかつた。後に Marx が「資本論第一卷の序文中に Lassalle が資本の歷史的性質、生產關係と生產方法との關係其他に就て

Marxの說を其用語の末に到る迄借用し乍ら、其出處を示す事をしなかつたと記して居るのは今では周知の事實である(Das Kapital S. V)。而して更にMarx以前にはRodbertusが出でゝ純經濟的範疇としての資本と、歷史的法律的範疇としての資本とを峻別して居るのは既に始めに記した通りである。

五

Rodbertusは既に一八四二年其Zur Erkenntnis unserer staatswissenschaftlichen Zustände の中で、右の二概念を區別して居る。即ち「狹義若しくは本來の意義に於ける資本」das Capital im engeren oder eigentlichen Sinne と「廣義に於ける資本又は企業基金」Cim weiteren Sinne oder Unternehmungsfond とである。前者は道具機械及び原料の蓄積を總括し、後者は現在の分業關係の下に於て一企業の爲め必要なる全基金額を指稱する。現在の事情の下では企業家の基金は啻に原料と器具機械と許りでなく、併せて必要なる賃銀並に賃料(地代及び利子)を支拂ふに足る丈けの貨幣を包括しなければならぬ。前者は生產の開始に當つて現實に存在する一定量の財の蓄積であるが、後者は單に流通手段の蓄積量に過ぎぬ。而して此蓄積は何等の現存財を代表せずして、たゞ將來の生產物の分前を代表する。前者は生產の爲め絕對的に必要なる資本であるが、後者は現在の事情に依て相對的に必要となるに過ぎぬ。而して狹義に於ける資本のみが國民資本であると。此思想は一八六八年の著 Zur Erklärung und Abhilfe der heutigen Kreditnot des Grundbesitzes の中で更に詳しく述べてある。其一節を引用すると、吾人は土地並に資本の私有を基礎とする今日の社會狀態を、凡べての關係に於て、第一には所有權が土地と資本と許りでなく、人間其者をも含む狀態、即ち人間所有の猶ほ行はれて居る狀態、第二には土地並に資本は最早所有せられずして、所得のみが所有せらるゝ狀態、即ち所得所有 Einkommenseigentum のみが猶ほ行はれて居る狀態と比較することに依て、一層よく理解する事が出來る。斯る二樣の比較を行ふ事に依て、當面の問題たる資本當體若しくは國民資本と、資本財產又は企業基金とも呼ばるゝ私人資本との區別も亦た明かにせられる。即ち吾人は此兩者の相異は兩者の構成要素が互に一致しないのにある事を認めるのである。資本當體若しく國民資本に屬するのは、原料及び道具機械のみであつて、賃銀も賃料も之には屬せぬ。資本財產若しくは企業基金には、土地並びに資

本私有の狀態に於ては、啻に一企業の原料並に道具機械の價値許りでなく賃銀も、否な賃料も、その企業家に依て支出せらるるものなる限り之に屬するのである。現在の學説はこの資本當體と資本財産との二者を同一視して、賃銀を資本當體若しくは國民資本に數へるの過ちを犯かして居ると。彼れは又私的資本が法律制度の變更に依て其内容を異にするに至るべき事を述べて云ふのに「資本當體と資本財産との別が兩者各々構成要素を異にする點に於て認められる樣に、資本財産の内容は又現行所有權法の改變に從て變動する事實に依て、資本財産又は企業基金は、現行所有法――土地並に資本私有――に依て經濟學に輸入せられた一要素であることが認められる」。「即ち所有權を擴張して、人間所有（奴隷制）に及ぼせば、資本財産は土地及び資本所有の限界に拘束せられつゝある今日よりも、更に多くの要素を包括することになる。土地並びに資本所有制の下では、通常前述の如く賃銀及び賃料をも其中に含むのであるが、人間所有制度の下では、更に當然人間その者の價値をも含む。」反之所有權を單に所得にのみ限るときは、啻に勞働者其者許りでなく、賃銀及び賃料も亦資本財産の概念から脱落する。資本財産は縮少して國民的資本に歸着し、原料と生産要具とは國民が（其曉には自ら企業家として）顧慮すべき唯一の資本價値となると。（Spiethoff S. 12. 13）Rodbertus が其遺著 Das. Kapital 1884 に述べるところも、主旨に於て上述と變はるところはない。彼れは玆にも亦た私的資本が一定の法制、即ち土地資本私有制を條件として成立するもの、換言すれば法制史の産物で決して永久的本質的概念ではない事を反覆するのである。（S. 314-15）

六

Rodbertus は資本當體と資本財産とを峻別する事に依て從來の混亂紛糾を一掃するの端を開いた。併し、彼れは決して一定の歴史的法制的産物なる私的資本（資本財産）のみを以て資本としたのではなく、資本當體も資本財産も共に資本なることを認める點に於ては、Adam Smith から幾許も距たるものでなかつた。然るに Marx に至ると、資本は純然たる歴史的法律的概念で、所謂資本當體は最早之を資本とは認めない。生産要具及び食料品其者は直ちに資本ではなくて、それが勞働者を搾取し且つ制御する手段 Exploitations-und Beherrschungsmittel des Arbeiters となるを俟て

始めて資本となるのである。それでは生産要具は如何なる場合に勞働者の搾取並に制御手段となるか。その大略を説明すれば斯うである。

資本が成立する爲めには先づ商品流通と云ふことがなくてはならぬ。「商品生産並に發達せる商品流通、即ち商業、は資本の成立する歷史的前提條件をなす」のである。ところで商品流通の經濟上の形式丈けを觀察すると、商品生産の最終の産物は貨幣である。而して「この商品生産の最終産物は、即ち資本の最初の出現形態である」。それでは貨幣は如何なる場合に資本となるか。之を簡約して云へば、物を買ふ爲め支出せられた貨幣が、量に於て增加して復歸するとき、若しくは量を增して復歸せしめる爲め貨幣を支出する時それが資本となる。Marxの方式で云へばG—W—G'(より高く賣らんが爲めに買ふ)なる流通運動に投じられた場合、貨幣は資本となるのである。然らば貨幣の增加量は何處から生ずるか。G'とGとの差額なる、餘剩價値は何處から生ずるか。Marxの見るところに從へば「流通若しくは商品交換は價値を創造しない」(S. 126)。餘剩價値の成立、從て貨幣の資本化は、賣手が價値以上に商品を賣ることに依ても、又買手が價値以下に商品を買ふことに依ても説明せられない」のである。(S. 124)即ち資本家たらんとする貨幣所有者は「商品を其價値で買ひ、其價値で賣つて、而かも猶ほ其手續の終りに於て彼れが投じたよりも多くの價値を引出さなければならぬ」(S. 129)のである。それには何うすればよいか。既に相交換せらるゝ二物は同價値でなくてはならぬ約束であるから、上述G—W—G'なる方式に於て、W(商品)は其前半のG(貨幣)とも後半のG'(增量貨幣)とも同價値でなければならぬ。さうすると、變化はWなる商品の使用價値、即ちその消費に於て發生しなければならぬと云ふ結論になる。そこで「一商品の消費から價値を引出す爲めには、我貨幣所有者は、流通界内に於て、即ち市場に於て、幸運にもその使用價値其者が直ちに價値の泉源となり、その現實の消費其者が直ちに勞働の具體化であり、從つて價値創造であると云ふ特殊の性質を具有する一商品を發見し得なければならぬ」。而して實際彼れは斯る商品を發見する。それは勞働力である。併し人は如何なる時代、如何なる社會に於ても商品たる勞働力を市場に發見し得る譯ではない。勞働力は其所有者たる人が、之を賣る場合に於てのみ、商品として市場に現はれるのであるが、所有者が之を賣る爲めには、彼れは第一に先づ

之を自由に處分する權を有たなければならぬ。即ち其勞働能力、其人格の自由なる持主でなければならぬ。彼れと貨幣所有者とは法律上對等なる商品持主として市場に對立する。相異するところは一方が買手で、一方が賣手だと云ふ事許りである。此關係の持續する爲めには、勞働力の持主がそれを一定時間分丈け賣ることを要する。若しその全部を一括して賣れば、彼れは己れ自身を賣る事になつて、自由人が化して奴隷となり、商品所有者が化して商品其者となるのである。次に貨幣所有者が、商品たる勞働力を市場に見出し得る爲めの第二の條件は、勞働力の所有者が、其勞働力を體化して商品を賣らずに、直ちに勞働力其者を賣らなければならぬ事である。ところが、人が其勞働力とは異つた商品を賣ることを得んが爲めには、生産要具即ち原料勞働用具等を持たなければならぬ事は勿論である。猶ほ其外に生産物を造つてから賣る迄の食料品をも要する。

即ち貨幣が化して資本となる爲めには貨幣所有者に商品市場に於て二重の意味に於て自由なる勞働者を見さなければならぬ。二重の意味と云ふのは、即ち勞働者が自由人として、其勞働力を自家の商品として、處分し得る事、他方に於て、彼れが賣るべき他の商品を有たぬ事、即ち其勞働力を實現する爲め必要なる一切の物件から自由なる（即ち之を有せぬ）事の意味である」(S. 129-131)。而して買はれた勞働力が、其價値以上の勞働を提供する場合、別の言葉で云へば、賃備せられた勞働者が、其の自己の生活を支へる爲めに必要なる時間以上の勞働に服する場合に、始めて餘剩價値が發生し、Gが G' となつて其所有者の手に復歸するのである。

斯かる條件の備はることを俟つて始めて資本は成立する。貨幣若しくは商品所有者と、自由無資産勞働者との對立は「決して自然的關係でもなく、又如何なる時代にも共通なる社會的關係でもない。それは明かに既往の史的發達の産物であり、幾多の經濟的革命、幾多社會的生産の舊形態廢滅の結果である」(S. 132)「故に資本は始めから社會的生産の或時代を示して居るのである」(S. 133)。茲に至つて Marx と Adam Smith 後繼者との立場の相違は充分明白になつた。資本と非資本とを分つ標準は、生産要具たると否とにあるのではなくて、資本を造るものは一定の社會的關係である。故に曰く、「直接生産者の所有物たる生産要具及び食料は、資本ではない。是等のものは、それが同時に勞働者を搾取制御するの手段となる條件の下

に於てのみ資本となる」と。又或は曰く「一個の黑人は一個の黑人である。一定の關係の下に於て始めてそれが奴隷となる。紡績機械は木綿を紡ぐ一個の機械である。一定の關係に於てのみそれは資本となる。此關係から脫却すれば、機械の資本たらざることは、猶ほ金の其れ自體で貨幣たらず、砂糖の其れ自體で砂糖價格たらざると擇ぶところはない。……資本は一の社會的生產關係である。それは一の歷史的生產關係である」と(S. 731)。

七

Marxは Lassalle が己れの學說を借用し乍ら、其出處を明示しなかつた事を不快とする語氣を漏らして居る事は既に述べた。右に引用した Marx の最後の一句は、既に彼れの一八四九年の著作 (Lohnarbeit und Kapital) に揭げられて居る。而して全集編纂者たる Bernstein も此點に於て Lassalle の遂に辯護す可らざる事を承認して居る (a. a. O. S. 12)に徵すれば Herr Bastiat-Schulze に於ける資本論は畢竟 Marx の通俗化と認むべきものなる事、猶ほ Lassalle の「勞働者綱領」の「共產黨宣言」に於けるが如きものであると云つて大過はなからう。

Lassalle の說は「資本は一の歷史的範疇である」と云ふ一語に簡約される。それ故彼れは特定の歷史的狀態とは無關係に立てられた、從來の資本概念を先づ斥けなければならぬ。從來資本の定義として行はれ來つたものは大體三つある。資本は「勞働要具」なりとするもの、「蓄積せられた勞働」とするもの、「更に生產に投ぜらるゝ生產物」なりとなすものが是である。「亞米利加の原始林に、手に弓を携へて其食物を獵獲する印度人を一瞥し給へ。此男は資本家だらうか。此弓は資本だらうか。三つの定義は何れも皆的中して居る。弓は誠に勞働要具である。同じく蓄積勞働でもある。又更に生產に投ぜらるゝ生產物でもある。而かも猶ほ、Schulze 君、此印度人を資本家と呼ぶ事は貴下の感情が之を許さぬであらう。して見れば是等の定義は皆誤謬でなくてはならぬ……或は貴下は己れの感情を强制して、此弓は資本である。從て印度人は小資本家であると云はれるかも知れぬ。併し、それならば彼の弓の資本ならず、彼の印度人の資本家ならざる事を貴下に示すは甚だ容易の業である。」何故此場合の弓は資本ではないか。Lassalle の云ふところに從へば、それは所有者が之を放置すれば增殖することがないからである。成程弓は其

所有者の勞働を助ける事は疑を容れない。併し一度彼れが山野の馳驅に疲れたとき、彼れは無爲にして此弓をして收利せしめる譯には行かない。然るに收利し、若しくは增殖し得る事 werbend auftreten zu können は資本の絕對的要件である。故に弓は勞働要具ではあるが、資本ではないのである(S. 172)。勞働要具はあり、否な交換さへも行はれて、而かも猶ほ資本のない歷史的狀態のあることを記憶しなければならぬ。故に資本を成立せしめる爲めには人は先づ亞米利加の原始林を去つて歐羅巴と同じ水準に在る國に移らなければならぬ。併し歐羅巴に於ても如何なる時代にも資本があつたのではない。土地と、奴隸と、勞働產物と、勞働要具とが併せて一人の手に所有せられた古代に於ては、有價物並びに富はあつたが資本はない。主人 Herren はあつたが、資本家はない。古代豪族は富を蓄積しても、之を利殖することが出來なかつた。資本の胚種 (Kapitalembryo) はあつたがそれはまだ資本になつて居なかつたのである (S. 178)。寶物勤務、寶物給付の關係を基礎とする中世の地主に就ても同じ事が云はれ得る。同業組合の規約に拘束せられて居た手工業の親方も亦た同じく資本家ではない。手工業の生產收益は未だ資本化することを得なかつた。別の言葉で云へば親方の稼ぎ得た金はまだ孵化しなかつたのである。(Der Thaler, den der Meister verdient, ist ein todter Thaler, ein Thaler, der nicht heckt)

Lassalle は屢々增殖 *werbend* anlegen oder *werbend* auftreten) 又は貨幣の孵化と云ふ言葉を用ゐるが、如何なる條件が備はる時、價値、富若しくは勞働要具は「增殖」し、或は貨幣は孵化するか。Lassalle の論述が bildlich である爲め、其主旨を的確な言葉で紹介することは稍々困難を感ずるが、Lassalle の分配理論に依ると、生產物の價値若しくは價格は究極其の生產費に歸着する。而して生產費とは一物の製作に必要なる勞働時間の謂であつて、生產に費やされた一分一秒、勞働者が流した汗の一滴は悉く生產物の價格となつて現はれる。然るに同じ道理に依つて、勞働者の賃銀は習慣上必要なる生活費に歸着するから、勞働生產物の中から習慣上必要なる勞働者の要求を差引いた後に殘る一切の餘剩は、悉く樣々の形で資本に歸屬する。即ち資本配當(プレミヤム)となるのである(S. 194 ff.)。而して勞働者の生產物を奪ふところに資本の生產力(餘剩を生む力)の秘密は存する。生產物の爲めに費やされた勞働量と賃銀との相違から利潤と資本の增殖力(werbende Kraft)とが生ずると云ひ、更に續けて勞働

者自らの賃銀は習慣生活必要費額に停まつて居るのに、勞働者の汗の如何なる一滴も、生産物の價格に現はれぬものはない。企業家の手に在る如何なる Thaler も新に生産に投ぜらるゝ事に依て、明日新たなる Thaler を造らぬものはない。そこで此二句を合して一にすれば「如何なる一 Thaler も、即ち勞働者の如何なる汗の一滴も、明日勞働者の爲めには徒らなる汗の一滴を造り、資本の爲めには新しき一 Thaler を造らぬものはない」と云ふ事が出來る。而して生産物の價格、從て勞働者の生活必要費を低廉にすることが出來れば出來る程、此勞働生産力の增進と共に勞働所得は增加しないで、生産の資本化力 kapitalisierende Kraft der Produktion が高められる。而して資本家は勞働者の汗の各一滴を資本化することが出來る、即ち勞働者に取ては新しい汗の一滴、資本自體に取ては新しい一 Thaler の源泉となす事が出來る (S. 204) と云ふに徵すれば、Lassalle は勞働者を搾取制御する手段を以て資本とする Marx と同じ立場に在るものと見て差支ないだらう。

勞働要具が自ら獨立し、人間たる勞働者と主客其地を更へたときに資本となると云ふのも亦同じ意味と解釋する事が出來る。印度人の弓は何故に資本でないか。それは勞働を搾取制御する手段となつて居らぬからである。Lassalle 曰く吾々が始め其れから出發した「個人的若しくは孤立的勞働の原始狀態に於ては、勞働要具(印度人の弓)は勞働者其人の手に在つた。即勞働のみが生産的(プロドクティヴ)であつた。勞働が勞働全産物を收得した)。然るに分業に依て、(分業とは彼の印度人の勞働とは違つて協同勞働、共同生産經營を意味する……)又從て分業から漸次に必然的に發達せる交換價値生産の制度に依て、最後に交換價値の生産に由て生じなければならぬ自由競爭に依て、勞働要具が勞働者から分離して獨立し、其口を以て勞働から一切の生産力を吸取し、勞働は其代りに生活力消耗の補充丈けを得るに止まると云ふ、即勞働が不生産的となると云ふ、彼の出發點とは正反對の結果に遂に必然到達する。始めは勞働のみが生産的であつたが、今は勞働者から離れた勞働要具のみが生産的となる(餘剩を收得するの義)。獨立して勞働者と其役目を替へた勞働要具は、生ける勞働者 den lebendigen Arbeiter を死せる勞働要具 zum todten Arbeitsinstrument に引下げ、己れを、即ち死せる勞働要具を、生ける增殖器官たらしめた。之れが即ち資本である」。と (S. 211. 212)。而して勞働要具が此境地に達するには勿論一定の歷

史的條件が備はるのを待たなければならぬ。而して市民經濟學の大誤謬は資本を「必然的論理的範疇」と認める事に在る。「資本の生産力(餘剰を生む力)は自然的法則ではなくて、全く一の歴史的狀態 historische Zustände の作用であつて、此歴史的狀態は他の歴史的狀態と共に再び消滅し得るもの、又消滅しなければならぬものである」(S. 210) と云ふに至つて Lassalle の眞意を誤解すべき餘地は全くないのである。

八

Rodbertus, Marx, Lassalle の資本觀は以上を以て其大略を盡した。Wagner Böhm-Bawerk 以來、近時經濟學の大勢は、資本なる名辭に私的資本と國民資本、又は營利資本と生産資本の二義あることを明かにして、Smith 以來の混雜を避けようとするにあるらしい。私は異なる二物に命ずるに同一稱呼を以てするの必要を疑ふものではあるが、必しも多數經濟學者の慣行を姑らく寛假せぬ者ではない。(Marx, Lassalle と共に、絶對的範疇としての資本を全然否認する有力なる議論は、福田博士國民經濟講話坤卷一二一九頁以下に就て之を窺ふべし)。たゞ併し、之に先だつて、吾々は、純經濟的概念たる生産要具と、歴史的法律的概念たる收入基本との全然別物なることを知らなければならぬ。而して Rodbertus の資本當體と資本財産との區別、Marx, Lassalle の資本の歴史的概念なることの力説は此相違を明にする上に非常な效果があつた。之れは社會主義者の經濟學に對する恐らく最大なる貢獻の一であらう。(完)

九年六月二十一日